

雨が、降っている。

” サあア—————”

なんてきれいなんだろう、と彼女は思った。清流のように澄んだ音。からだのすみずみまでを通して、よけいなものをすべて洗い流していつてくれる。寒がりの彼女ではあったが、空気がうるおっているせいか、今朝は平気に思えた。いつまででも、ここで待ってられる気がする。目を閉じると、しっとりとした雨の感触がした。

「——傘、ないの？」

声が出た。それまで全身をつつんでいたものが、遮られる気配。ゆっくりまぶたを持ち上げると、そこには見た事もない男性が、心配そうな眼差しでこちらをみている。

「よかったら、どうぞ」

傘を差し出して、彼はそう言った。彼女は、目をしばたかせた。

「あの。人違いでは」

「そうなの？」

「そうなのって……、だって、わたしのこと、知りませんよね？」

「ん、どうだろう」

「どうだろうって……」

いちいち、気に障る言い方をする人だ、と彼女は思った。

「すくなくとも、わたしは、あなたを知りません」

次第に、声が低くなる。

「ですから、これを受け取る理由もありません」

「なんで？」

彼は、不思議そうだった。

「関係ないじゃん。知らなくても、困っている人がいたら、助けるでしょ、ふつう」

「悪かったわね、ふつうじゃなくて。だいたい」

そこまでいって彼女は、はっとしたように口をつぐんだ。すぐに感情的になるのは、彼女の悪い癖だった。自覚しているのに、本人も気をつけてはいるのだが、頭に血がのぼると、気をつけよう、という意識そのものがなくなってしまうらしい。

彼女がいつまでたっても黙っているのに、彼はしびれを切らしたのか、一步、前に出た。

「なんでそんな怒ってるのさ。いいから、はい、これあげるから。遠慮せずに使えばいいよ」

そして、無理やり傘を押し付けると、じゃあね、と言って、雨の中を走っていった。

数分後、我に返った彼女は、傘を手をしている自分に気がついた。

それまで、どっぷり自己嫌悪に浸っていたのだった。

(ああ、またやってしまった……)

受け取ってしまった傘は、敗北の証のようにみえた。

(どうして、うまく人と接することができないんだろう。あの人は、親切で声をかけてくれたのだろうに、とっさのことで頭が混乱して、なぜか喧嘩を売るようなことになってしまった。ああ、もう、穴があったら入りたい……)

泣きそうな気持ちで、地面をみつめた。いつのまにか雨の勢いは増していて、いくら濡れるのが好きな彼女でも、シャレにならないところだった。そう思うと、自己嫌悪は深まる一方で、いっその傘を放り投げて、雨に打たれようかという気持ちになった。

しかし、まさか捨てていくわけにもいかない。

そこまで考えて、彼女は気がついた。

(そういえば、この傘、どうしよう。返さないと。でも、どうやって？ どこのだれかもわからないのに?)

せめて連絡先を聞けばよかった、と再び自己嫌悪に陥りそうになった彼女だったが、すんでのところで留まった。そもそも、連絡先を聞くことなど、できるわけがないことに気がついたのだ。そんなことができるくらいなら、こんな状況にはなっていない。

(……やっぱり、諸悪の根源は、あっちだ。せっかくいい気分だったのに、いまはこんなに悶々とした気持ちなんだもの。わたしは被害者だ)

ほとんどやけになって、彼女はそう結論づけた。

ちょうどそのとき、タイミングよくバスが到着した。

傘を閉じて、定期を取り出し、運転手にみせると、いつものようにいちばん前の席に座る。

ブザーと共に扉が閉まり、バスはゆっくりと発車した。

その心地よい揺れの中で、彼女は目を閉じた。

そうすると、まるでいままでのできごとが、夢のように思えた。

——本当に夢だったらいいのに

そんな彼女をあざ笑うかのように、たてかけた傘の先から、ぽたぽたと雫が伝っていた。